



小杉考司

専修大学人間科学部 教授

驚くべきことに、心理尺度の作り方について専門的に論じた邦書はほとんどなく、筆者の知る限りこれが2冊目である。1冊目は村上(2006)だが、こちらは「尺度作成」の具体的な作業の手順だけに焦点化しているのに対し、本書はより包括的で、心理尺度にまつわる話題を広範囲に扱っており、現代的话题や新しい統計技術にも詳しく言及していることなどから、このテーマの決定版ともいえるべき一冊である。

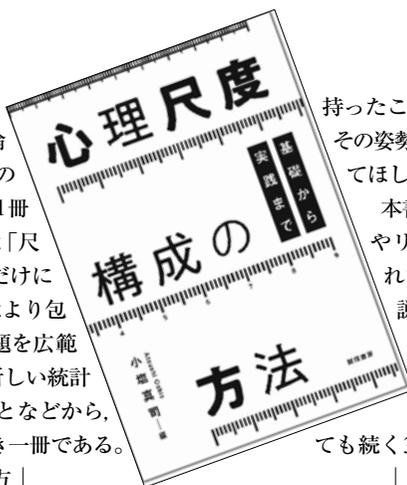
類書がほとんど存在しない一方で、尺度の開発や利用は非常に活発である。新しい心理尺度が次々提案され、心理学の他領域(教育評価, 医療看護, 経済や哲学の領域など)でも心理尺度に基づいた研究が量産されている。これは自前の尺度をつくり、使う調査研究は誰にでもできるものだと思われることの表れであろう。

実際、学校の実習や演習の授業の一環で調査研究を扱うことは多く、心理学系の授業であれば「尺度を作ってみる」という演習もあるだろう。心理学研究法の教科書

の一部に調査法があり、尺度作成の方法が数ページでコンパクトに紹介されていたりもする。

筆者はかつて、尺度作成はライフワークであり、数年単位で完成するようなものではない、と教わった。しかしその後、電子計算機や統計技術の発展、最近ではインターネットを介した研究法の登場などもあって、尺度の作成作業と手順に係るコストが大幅に縮小された。同時に、その中で原理や思想的背景の伝達がなされぬまま、作成マニュアルだけか広がっていったという経緯がある。

そんな今、本書が著されたことは非常に大きな意義がある。もし「目盛に丸をするだけで数値化されるというのはどういう根拠があるのか」と疑問をもったことが一度でもあれば、ぜひ本書を通読してほしい。またもしそのような疑問を一度も



持ったことのない読者がいれば、むしろその姿勢を省みるために本書を手にとってほしい。

本書は1章・2章で正規分布の導入やリッカートのシグマ法に言及されているが、このような根本的な説明が冒頭にあるテキストは近年みることがない。3,4章は尺度作成の手順を丁寧に論じているし、信頼性と妥当性についても続く3つの章を割いて丁寧に扱って

いる。第8章では潜在ランク理論など最新の統計技法についても触れられている。

また後半に進むにつれて、より実践的でより読み応えのある議論が展開されていく。心理尺度の構造と得点化の方法(9章)、反応バイアスの検出と補正(10章)、短縮版心理尺度の開発と意義(11章)は現代的ニーズと対応技術を知る上で重要である。測定に関する本質的問い(12章)や、妥当性に直結する臨床現場での現状(13章)は、心理学における心理尺度の作り方・

使い方を批判的に見ることができる。尺度を作ることで研究が展開するという側面もあるし(14章)、具体的な実例(15,16章)からは、正しく使えば有用であることもまた、しっかりと理解できる。

誰でも簡単に作れることと、正しく扱えることは別である。高度な技術を無駄に駆使して導いた数字に翻弄されるのではなく、実態を正しく捉えた実のある研究実践のためにも、本書を通じて心理尺度の理解が深まり世に広く浸透することを切に願ってやまない。

文献

村上宣寛, 2006, 『心理尺度のつくり方』北大路書房。

## 心理尺度構成の方法

基礎から実践まで

小塩真司 編

誠信書房  
2024年  
A5判, 286頁  
3,850円+税